

韓国における夏季短期研修プログラムの実践報告

林 河運

1. はじめに

近年、新型コロナウイルス感染症の影響により、日本人学生の海外留学者数は大幅に減少していた。しかし、(独)日本学生支援機構(2024)の調査によると、2022年度の大学等が把握している海外留学者数は58,162人に達し、前年度から47,163人増加し、実に428.8%もの回復を示している。また、地域別および留学期間別の分析では、特にアジア地域への短期留学の顕著な増加が報告されている。例えば、2021年度には472人であったアジア地域への1か月未満の短期留学者数が、2022年度には28,524人にまで増加している。このように、短期海外研修が学生の海外学習における主要な形式となっている背景には、いくつかの要因が存在する。Gaia(2015)は、短期研修が学生にとって参加しやすい理由として以下の点を指摘している。第一に、長期留学に比べて経済的負担が少なく、時間的制約も緩和されることで、学生の負担が大幅に軽減される点である。第二に、短期研修は大学のカリキュラムに容易に組み込むことが可能であり、学業との両立を図りやすい点が重要である。第三に、長期留学が難しい学生にとって、短期研修は安全かつ気軽に参加できる初期の国際体験の機会を提供しており、文化交流や学びの場として機能している。また、このようなプログラムは、特に1年次や2年次の学生にとって、国際教育への関心を高める有効な手段であり、将来的に長期留学を目指すきっかけとなる可能性がある。さらに、現代のグローバル化が進展する中、異文化理解と語学習得の重要性はこれまで以上に高まっている。特に、日本と韓国のように地理的近接性や歴史的背景を共有する国々では、経済的および社会的な交流が深まる中で、文化的な相互理解を促進する取り組みが求められている。このような背景において実施される韓国夏季短期研修プログラムは、日本人学生に韓国の言語や文化を直接体験する場を提供する重要な教育的機会としての役割を果たしている。このプログラムは、学生の学習意欲を向上させるとともに、異文化交流を通じた成長を促す意義を有している。本稿では、島根大学が令和6年度の夏季休暇期間を活用して実施した韓国夏季短期研修プログラムを取り上げ、その計画から実施までの過程を詳細に検討する。また、研修の成功を支えた工夫や運営上の課題について分析し、実践的な視点から成果と今後の課題について考察する。本研究が異文化理解を深めるための研修プログラム設計や運営の改善に寄与することを期待している。

2. 研修の概要

本章では、令和6年度に実施された韓国夏季短期研修プログラムの概要について述べる。具体的には、プログラムの参加条件、日程構成、および研修内容の詳細について説明する。本研修は、韓国語および韓国文化の習得を目的とし、異文化理解を深めることを主眼に置いて設計された。また、令和6年度では、韓国外国語大学の学生寮の確保のため、4月初

め頃に夏季研修の説明会を開催し、4月中旬から5月中旬までに募集をかけた。その後、渡航前に事前研修（2コマ程度）を行い、帰国後に事後研修（1コマ程度）として研修成果の発表会を行った。

2.1. 参加条件

島根大学では、韓国夏季短期研修プログラムへの参加者に対して特定の資格制限を設けていない。令和6年度の研修には15名が参加し、その内訳は、韓国語学習歴がない学生が2名、学習歴がある学生が13名であった。韓国語学習歴がない2名の学生には、研修出発日までに独学で基礎的な韓国語を学習するよう指導を行った。このように、参加者の多様な学習背景に配慮し、柔軟な対応を行うことで、多様な学生に研修機会を提供している。

<表1> 参加学生のプロフィール

	学部／学科	学年	性別	海外渡航歴	韓国語能力
学生1	材料エネルギー学部材料エネルギー学科	1	男	アメリカ	韓国語 I 履修
学生2	生物資源科学部環境共生科学科	2	女		TOPIK2級
学生3	法文学部 言語文化学科	1	女		韓国語 I 履修
学生4	教育学部学校教育課程 I 類	1	女		韓国語 I 履修
学生5	教育学部小学校教育専攻	3	女		履修歴なし
学生6	総合理工学部物質化学科	1	男		韓国語 I 履修
学生7	総合理工学部物質化学科	1	男		韓国語 I 履修
学生8	教育学部学校教育課程一類	1	女		韓国語 I 履修
学生9	総合理工学部地球科学科	1	男		韓国語 I 履修
学生10	総合理工学部物質化学科	1	女		韓国語 I 履修
学生11	教育学部小学校専攻	2	女		韓国語 I II 履修
学生12	教育学部英語科教育専攻	2	女	オーストラリア	TOPIK2級
学生13	人間社会科学研究科	M1	女	韓国	韓国語 I II 履修
学生14	生物資源科学部環境共生科学科	1	男	オーストラリア	韓国語 I 履修
学生15	生物資源科学部環境共生科学科	4	男	中国	履修歴なし

2.2. 研修プログラムの概要

本研究で取り上げる韓国夏季短期研修プログラム¹は、島根大学国際センターが主催²する海外短期研修プログラムの一部であり、全学基礎教育科目「韓国の文化と風土」の一環として実施されている。

¹ 本研修における宿泊施設は、韓国外国語大学が提供する学生寮を利用した。

² 島根大学では、授業の一環として、春・夏・冬の長期休暇時期にアメリカ、中国、韓国などでの海外研修を実施している。これらの研修は、語学研修、異文化体験、ホームステイ、現地学生との交流など、目的や希望に沿って選べる盛りだくさんの内容になっている。

本プログラムは、2週間にわたる研修期間の中で、韓国語授業、異文化体験活動、研修先大学の学生との交流活動、自主研修（釜山（부산）³の観光を含む）を組み合わせた構成となっている。さらに、事前研修および事後研修も実施され、すべてを修了した参加者には2単位が付与されるとともに、大学から5万円の奨学金が支給される⁴。

本プログラムにおける活動のうち、自主研修を除く全ての教育活動は、韓国外語大学の韓国語文化教育院⁵が提供する特別課程に基づいて実施されている。異文化体験プログラムに関しては、同教育院が提供するさまざまな活動の中から、事前に学習者を対象としたアンケート調査を実施し、最も評判の高いプログラムを選定している。このプロセスにより、学習者のニーズに基づく柔軟かつ効果的なプログラム設計が可能となり、特に日本人大学生を対象⁶とした教育的効果の高い内容となっている。

2.2.1. 韓国語授業のクラス分け

研修先での韓国語授業におけるクラス分けは、韓国外語大学に委託されている。令和6年度の研修では、韓国外語大学の韓国語文化教育院が Google Forms を活用して事前アンケートを実施し、参加者の韓国語レベルを把握した。このアンケート結果に基づき、参加者はレベル1のクラス（6名）とレベル2のクラス（9名）の2つのクラスに編成された。このように、事前アンケートを活用したクラス分けは、学習者一人ひとりの習熟度に応じた指導を可能にし、適切な学習環境の提供に寄与している。この方法により、効果的かつ効率的な授業運営が実現し、学習者の理解度や満足度の向上が期待される。

2.2.2. 異文化体験活動のアンケート結果

異文化体験活動の選定にあたっては、韓国外語大学の韓国語文化教育院が提供するプログラムを基に、事前アンケート調査を実施した。この調査では、島根大学の「国際文化情報C（韓国朝鮮語圏）」を履修する学生43名を対象に、最も参加したい文化体験活動についての意見を収集した。その結果、学生が希望する活動は、テーマパーク訪問（ロッテワールド、エバーランドなど）、韓国料理体験、K-POPダンス体験、伝統工芸体験、公演観覧（NANTAなど）、韓国の楽器体験、茶道体験、テグォンド（テコンドー）、カリグラフィ体験の順であった。この結果を基に、予算を考慮しながら活動の選定を行った。テーマパーク訪問およびNANTA公演観覧は、参加者が自主的に体験可能な活動であるため

³ 令和5年度の夏季短期研修において、参加者からソウル以外の観光地への訪問を希望する意見が多数寄せられた。これを受けて、今年度のプログラムでは釜山観光を新たに組み込むこととし、参加者募集の段階からその内容を案内した。しかし、参加費用の負担を考慮し、釜山観光は自由参加とし、最終的に9名が参加することとなった。残りの6名については、ソウル市内での自主研修を行うこととした。

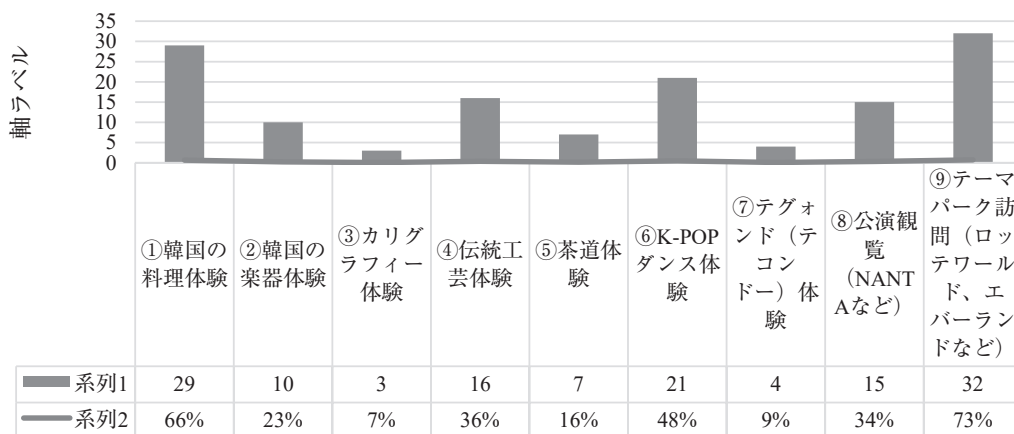
⁴ 単位取得の要件を満たさない参加者については、大学から支援策として奨学金3万円が給付される制度が設けられている。

⁵ 韓国外語大学の韓国語文化教育院は、国家機関、教育機関、企業など、韓国語および韓国文化の教育を必要とする機関から韓国語教育を委託されている。同教育院は、長年にわたる経験と蓄積されたノウハウを活用し、毎年国家事業にも参画している。また、特別課程における授業内容および構成は、委託機関や学習者のニーズに応じてパーソナライズされたプログラムとして提供されている。これにより、対象の目的や要件に応じた柔軟かつ効果的な教育が可能となっている。

⁶ 令和6年度の研修には、大学生13名、大学院生1名、さらに中国からの留学生1名の計15名が参加した。

プログラムから除外し、それ以外の上位4位⁷までの文化体験活動を夏季短期研修プログラムとして採択した。これにより、参加者の興味関心を反映した異文化体験活動の実施が可能となった。

図1 文化体験活動のアンケート結果



2.2.3. 研修先大学の学生との交流活動

韓国外国語大学の学生との交流活動は、令和6年度の研修プログラムにおいて初めて導入された。この取り組みは、令和5年度の参加者への研修終了後のアンケート調査で「現地大学生との交流を希望する」という意見が多数寄せられたことを受けて実現したものである。これを受け、韓国外国語大学の韓国語文化教育院の担当者と事前に協議を行い、交流活動を2回にわたってプログラムに組み込むことが決定された。しかし、研修期間が韓国外国語大学の夏季長期休暇と重なるため、現地学生の参加募集は困難を伴った。そこで、2回分の謝礼金を設定して参加者を募り、最終的に日本語学科の学生4名が参加することとなった。これにより、研修参加者と韓国人学生との交流が実現し、実践的な異文化コミュニケーションの場が提供された。交流活動の具体的な内容として、1回目は4つのグループに分かれてオリエンテーションを行い、その後、グループごとにソウル市内の観光を行った。2回目の交流では、韓国人学生がSNSを通じて日本人学生と直接連絡を取り合い、自由形式で実施された。このような活動を通じ、研修参加者は韓国文化への理解を深めるとともに、現地学生との相互学習の機会を得ることができた。

以下に、交流活動の具体的な様子を写真で示す。

⁷ 今回の研修において、事前アンケートで学生が希望した文化活動の第4位である「韓国の楽器体験」は、予約が満席で実施が困難であった。そのため、代替案として第5位に挙げられた「茶道体験」を急遽採用し、プログラム内で実施した。



＜韓国学生との交流活動としてオリエンテーションをする様子＞

2.2.4. 事前研修

本研修プログラムにおける事前研修は、参加者が研修を効率的かつ効果的に進めるための準備活動として位置付けられている。事前研修は、計2回実施され、ミッション設定を含む重要事項の説明と発表準備が行われた。以下に、各回の内容を示す。

＜一回目の事前研修＞

1回目の事前研修では、以下の内容が実施された。

- ①研修日程の詳細説明
- ②自主研修（ミッション型）の設定案内（例：韓国と日本 DAISO 比較、韓国の主要芸能事務所巡りなど）
- ③韓国の交通事情および即時還付制度の説明
- ④ SIM カードの紹介と設定方法の説明（eSIM カード購入を推奨）
- ⑤ NAVER Map の使用方法の練習
- ⑥ソウルや釜山の観光地、グルメスポットなどの紹介
- ⑦韓国研修時に必要な持ち物や現地で使える表現の案内
- ⑧訪韓教育旅行団体支援の申請に関する説明（NANTA 公演の予約日程決定⁸）
- ⑨参加者同士の自己紹介と意見交換
- ⑩ Moodle への登録指示と、2 回目の事前研修までにミッション発表用 PPT 資料の提出を課す

＜二回目の事前研修＞

2回目の事前研修では、以下の内容が取り上げられた

- ①学生寮および釜山ホテルの部屋割り決定（自由参加者のみ対象）
- ② KTX 高速鉄道チケットの時間決定

KTX- 청룡→ソウル駅出発 08：58 ～釜山駅到着 11：15

⁸今回は、韓国政府の訪韓教育旅行団体支援プログラムを利用し、無料で観覧することができた。

KTX- 산천→釜山駅出発 17:11～ソウル駅到着 19:48

- ③ eSIM カードの購入状況確認および設定最終確認
- ④ 訪韓教育旅行団体支援プログラム（NANTA 公演、ウェルカムキット提供）の最終申請
- ⑤ 学生寮入居時に必要な結核検査診断書（英語版）の説明
- ⑥ 必須持参品（布団、ドライヤーなど）の案内
- ⑦ 韓国の電圧（220V）や両替の方法、日本との生活習慣の違いの説明
- ⑧ LINE グループの作成と連絡手段の確認
- ⑨ 自主研修ミッションの発表会

これらの内容を通じ、研修に必要な実務的準備と学習者の自主性を高めるためのサポートが行われた。

2.2.5. 事後研修

事後研修は、研修プログラムの総括と振り返りを目的として実施される。参加者全員が一斉に参加することが難しいため、日程調整ツールを用いてアンケートを実施し、調整の上で2回に分けて実施された。以下に内容を示す。

<事後研修の主な内容>

- ① 国際課からの事務連絡事項
- ② 自主研修（ミッション型）の成果発表会
- ③ 研修全体に対する感想共有（良かった点、改善点の意見交換）
- ④ 研修期間や実施時期（夏休みか春休みか）に関する意見および次回の課題や要望の収集

これらを通じ、参加者の研修体験を共有するとともに、プログラムの改善点を明確にする場が設けられた。事後研修をもってプログラムは正式に終了し、参加者には2単位が付与され、5万円の奨学金が支給された。

2.3. 研修日程と内容

本研修は、2024年7月31日（水）から8月14日（水）までの14泊15日間にわたり実施された。この期間中、韓国外国語大学を拠点に、韓国語授業を核としつつ、異文化交流や現地大学生との相互活動、自主研修（釜山観光を含む）など、多岐にわたるプログラムが行われた。特に釜山観光は、令和5年度の研修参加者から寄せられた意見を反映し、新たに研修日程に加えられたものである。これにより、プログラムの多様性が向上し、参加者にとってより充実した体験が提供された。研修全体を通じて、参加者は異文化への理解を深めるとともに、実践的な言語運用能力の向上を図ることが期待された。

詳細なスケジュールと活動内容については、以下の表2にまとめている。

<表2> 研修日程と内容

	期日	場所	時間	交通機関	摘要	食事
①	7/31 (水)	米子空港	昼	航空機	米子空港にて現地集合 米子空港から仁川空港へ出発	なし
		仁川空港	午後	公共交通機関	韓国到着後、自分たちで公共交通機関を利用して宿泊先(学生寮)へ移動。	
		韓国外大の学生寮	夜		学生寮で宿泊	
②	8/1 (木)	韓国外国語大学の韓国語文化教育院にて	午前～昼		入校式後、教室へ移動し韓国語の授業	なし
		ソウル市内、ソウル近郊	午後	公共交通機関	韓国人学部生との交流活動(オリエンテーション後グループごとに移動)	
		韓国外大の学生寮	夜		学生寮で宿泊	
③	8/2 (金)	韓国外国語大学の韓国語文化教育院にて	午前～昼		韓国語の授業	なし
			午後	公共交通機関	K-POP ダンス体験	
		韓国外大の学生寮	夜		学生寮で宿泊	
④	8/3 (土)	韓国外大の学生寮	午前～昼	公共交通機関	自由行動	なし
		ソウル市内、ソウル近郊	午後		自主研修 (グループ活動も可能)	
		韓国外大の学生寮	夜		学生寮で宿泊	
⑤	8/4 (日)	韓国外大の学生寮	午前	公共交通機関	自由行動	なし
		ソウル市内、ソウル近郊	午後		自主研修 (グループ活動も可能)	
		韓国外大の学生寮	夜		学生寮で宿泊	

⑥	8/5 (月)	韓国外国語大学の韓国語文化教育院にて 韓国外大の学生寮	午前 午後 夜	 公共交通機関	韓国語の授業 韓国の茶道体験 学生寮で宿泊	なし
⑦	8/6 (火)	韓国外国語大学の韓国語文化教育院にて 韓国外大の学生寮	午前～昼 午後 夜	 公共交通機関	韓国語の授業 伝統工芸体験（印鑑作り体験など） 学生寮で宿泊	なし
⑧	8/7 (水)	韓国外国語大学の韓国語文化教育院にて ソウル市内、ソウル近郊 韓国外大の学生寮	午前～昼 午後 夜	 公共交通機関	韓国語の授業 韓国人学部生との交流活動 学生寮で宿泊	なし
⑨	8/8 (木)	韓国外国語大学の韓国語文化教育院にて NANTA 明洞劇場 韓国外大の学生寮	午前～昼 午後 夜	 公共交通機関	韓国語の授業 NANTA 公演を観覧（全員） 訪韓教育旅行団体支援プログラムを利用し、無料で観覧。 学生寮で宿泊	なし
⑩	8/9 (金)	韓国外国語大学の韓国語文化教育院にて 韓国外大の学生寮	午前～昼 午後 夜	 公共交通機関	韓国語の授業、その後退校式 韓国料理の体験 学生寮で宿泊	なし

⑪	8/10 (土)	韓国外大の学生寮 釜山市内、釜山近郊 東横イン釜山駅1	午前 午後 夜	公共交通機関	KTX（高速鉄道）に乗って釜山駅へ移動。 8：58 発 11：15 着 列車番号 9017 自主研修（グループ活動も可能） 東横イン釜山駅1で宿泊	なし
⑫	8/11 (日)	東横イン釜山駅1 釜山市内、釜山近郊 東横イン釜山駅1	午前 午後 夜	公共交通機関	自由行動 自主研修（グループ活動も可能） 東横イン釜山駅1で宿泊	なし
⑬	8/12 (月)	東横イン釜山駅1 釜山市内、釜山近郊 韓国外大の学生寮	午前 午後 夜	公共交通機関	自由行動 自主研修（グループ活動も可能）の後、KTX（高速鉄道）に乗ってソウルへ移動。 19：13 発 21：39 着 列車番号 58 学生寮で宿泊	なし
⑭	8/13 (火)	韓国外大の学生寮 ソウル市内、ソウル近郊 韓国外大の学生寮	午前 午後 夜	公共交通機関	自由行動 自主研修（グループ活動も可能） 学生寮で宿泊	なし
⑮	8/14 (水)	韓国外大の学生寮 仁川航空	午前 昼間	公共交通機関 航空機	学生寮の退所後、自分たちで公共交通機関を利用して仁川空港へ移動。 仁川航空から米子空港へ出発	なし

	日本	午後	米子空港到着後、現地解散 帰国後、自主研修結果を中心 に成果報告会を実施 その後、成果報告書提出
--	----	----	---

3. 研修参加者の声

夏季短期研修終了後、韓国外国語大学の韓国語文化教育院が実施した満足度アンケート調査において、研修参加者から多くの感想や意見が寄せられた。本アンケートは、鳥根大学特別短期課程プログラムに関する満足度を把握する目的で行われ、参加者の体験内容や改善点に関する率直な意見を収集する機会となった。

【2024・夏】鳥根大学特別短期課程プログラム満足度アンケート
<p>한국학생과의 교류 프로그램에 관해 하고 싶은 말을 쓰세요. 韓国人学生との交流プログラムについてよかった点や改善点などがあればご自由に書いてください。</p>
<p>色々な場所を案内してもらって助けられた。雑談も楽しかった。 自分たちの行きたいところまで親切に案内してくれたし、明るく接しやすかった。 慣れない土地だったため、率先して道案内をしてくださりとても助かりました。もう少し多くの学生さんと話し合いたかったです。 交流プログラムについて、語学上達よりも、文化と風土の理解を目的として参加しました。 いろんな観光地に連れて行ってもらえたり、韓国の文化なども教えてもらうことができるとてもよかった。 とても親身に接して下さい下さってすごく嬉しかったです！ 最近の若者言葉や流行など、観光したり調べるだけでは分からないことを知ることができたのでよかった。 私たちの意見を聞いて、それが実現できるように尽力してくれた。 韓国人学生が丁寧に案内してくれて楽しく観光できた。韓国人学生との交流時間ももっと増えると、韓国の文化についての理解の促進や、身近な語学力の向上につながると感じた。 流行りのものや学生さんおすすめの場所を知れて楽しかった。満足だった。 とても親切で仲良くなれたので良かったです。 とても楽しい思い出ができました！ありがとうございます！ 一緒に様々な場所に行っておすすめの場所やおすすめの食べ物を聞いたのがよかった。 韓国の学生が日本の何に興味があるのかを事前に知れていたらアニメグッズなどお土産に持って行けていいなと思った。</p>
<p>기억에 남는 활동을 적어주세요. 一番記憶に残る活動を書いてください。</p>

<p>ダンス体験</p> <p>外大生の方たちとの交流</p> <p>K-pop ダンス体験</p> <p>K-POP ダンス体験</p> <p>KPOP ダンス体験</p> <p>ロッテワールド、韓国のカフェ巡り</p> <p>K-POP ダンス体験</p> <p>大学生との交流</p> <p>K-pop ダンス体験</p> <p>韓国料理作り体験</p> <p>茶道体験がとても楽しかったです。</p> <p>韓国のカフェは雰囲気がいい</p> <p>料理体験</p> <p>ダンス体験がとても楽しく、良い経験になりました。</p> <p>茶道体験が日本との違いを感じられて勉強になりました。</p>
<p>그 외에 어떤 활동을 하고 싶습니까?</p> <p>その他、やりたい活動があればご自由に書いてください。</p>
<p>北朝鮮との国境に行きたい。</p> <p>K-POP アイドルのメイクが体験出来るところに行ってみたかったです。ただ、金額が高かったせいで、参加を躊躇してしまいました。</p> <p>伝統楽器体験</p> <p>韓国特有の雑貨など作ってみたいと思いました。</p> <p>韓国の伝統的な音楽を演奏したかったです。</p>

4. 参加者のフィードバックに基づく評価

アンケート結果の分析により、令和6年度の韓国夏季短期研修プログラムは、全体的に高い評価を得ていることが明らかとなった。特に、韓国人学生との交流プログラムや文化体験活動が参加者に大きな印象を与えており、多くの肯定的な意見が寄せられた。現地学生の丁寧で親切な案内が好評を博し、観光地への移動や現地情報の提供が不慣れな環境での大きな支えとなったと評価されている。具体的には、「訪れたい場所まで親切に案内してもらい、交流が非常に楽しいものとなった」「地元ならではの情報や流行について知ることができ、観光だけでは得られない貴重な体験ができた」などの声が挙げられた。また、文化体験活動についても、特に「K-POP ダンス体験」「茶道体験」「韓国料理作り体験」が印象深いものとして挙げられている。これらの活動は、韓国文化に直接触れる機会を提供するだけでなく、実践的な学びを通じて異文化理解を深める効果があったと考えられる。一方で、「韓国人学生との交流時間を増やしてほしい」「伝統楽器の演奏体験や韓国特有の雑貨制作を取り入れてほしい」「北朝鮮との国境に行きたい」といった要望も挙げられ、さら

なる体験活動の拡充が期待されている。さらに、「韓国大学生とのさらなる交流を図りたい」との意見も寄せられており、現地学生との相互関係の構築がプログラムの重要な要素であることが示唆される。これらのフィードバックは、次年度以降のプログラム改善に向けた具体的な示唆を提供するものであり、参加者の学びをさらに深めるための貴重な資料であるといえる。

5. 課題と改善点

アンケート結果によれば、令和6年度の韓国夏季短期研修プログラムは全般的に高い評価を受けており、多くの参加者がプログラムの内容に満足していることが明らかとなった。しかし、参加者のフィードバックを詳細に分析した結果、いくつかの改善すべき課題が浮かび上がっている。これらの課題に適切に対応することで、次年度以降のプログラムがより効果的で参加者にとって有意義なものとなることが期待される。研修内容の更なる充実を図るため、プログラムの構成や運営方法に新たな工夫を加え、参加者の期待に応える施策を実施する必要がある。

5.1. 交流活動の時間的制約

韓国大学生との交流活動は非常に高い評価を受けており、多くの参加者がその意義を認めている。しかしながら、「より多くの現地学生と話す機会が欲しい」「交流時間をさらに確保してほしい」との要望も多く挙げられている。この課題は、研修が現地大学生の夏季休暇期間中に実施されているという特性によるもので、交流活動に参加する学生の確保が難しい状況に起因している。また、単純に活動を増やすことは、参加費用の増加を招き、予算面での制約を生じさせる。このような背景を踏まえ、オンラインツールを活用した事前交流や、現地学生との柔軟なスケジュール調整を行うことで、より多くの接触機会を確保する可能性がある。さらに、予算を抑えつつ活動を充実させるためには、地元団体や大学との連携を強化し、支援を受ける仕組みを構築することが重要である。

5.2. 体験活動の選択肢の不足

文化活動に関する参加者の評価では、K-POP ダンス体験や韓国料理作り体験が特に高く評価されている一方で、「伝統楽器の演奏」や「韓国特有の雑貨制作」といった新たな要望も数多く見受けられた。このことから、参加者の多様なニーズに応えるためには、文化体験活動の選択肢をさらに拡充する必要性が示唆される。また、研修先の特別プログラムに含まれていない「K-POP アイドルのメイク体験」など、一部の要望については、費用の高さが参加の障壁となっていることが指摘された。こうした課題に対応するには、費用負担を軽減する仕組みの構築が求められる。具体的には、研修先の大学や地元の支援機関との連携を強化し、新たな文化活動の導入や費用面での調整を共同で検討することが必要である。例えば、地元の協力を得て割引制度を設けたり、選択制プログラムを導入することで、参加者が自身の興味や予算に応じた体験を選択できる仕組みを整備することが考えられる。

このような取り組みは、参加者の期待に応えるだけでなく、より充実した文化体験を提供し、プログラム全体の教育的価値を向上させる効果が期待される。また、多様な文化体験を取り入れることで、参加者が韓国文化の多面的な側面に触れる機会を増やし、異文化理解の深化を促進する効果があると考えられる。

5.3. 現地学生との情報共有不足

一部の参加者から、「韓国の学生が日本の何に興味を持っているのか事前を知る機会が欲しかった」との意見が寄せられた。この指摘は、研修前の情報共有が不十分であり、現地学生との相互理解を深める上での課題として浮き彫りになったものである。このような背景を踏まえ、事前の情報共有を強化し、両者の関係性を構築するための方策が求められる。その一例として、SNSを活用した事前交流の仕組みが挙げられる。専用のオンライングループを設け、互いの趣味や関心を共有できる場を提供することで、対面交流をより円滑で有意義なものにすることが期待される。簡易な自己紹介やアンケートの実施、グループディスカッションを通じて共通の話題を提供することで、研修中の対話が促進され、文化的視点の共有が進むと考えられる。こうした取り組みは、研修全体の質を向上させるだけでなく、参加者の期待感を高め、積極的な参加を促進する効果がある。情報共有の仕組みを整備することで、研修プログラムの教育的意義がさらに強化されるであろう。

5.4. 次年度に向けた改善案

これらの課題に対応するため、次年度の研修では以下のような改善策を検討する必要がある。

①交流プログラムの充実

現地学生との交流時間を拡充するためには、オンラインツールを活用した事前および事後交流活動の導入が効果的であると考えられる。例えば、参加者と韓国人学生が研修前にオンラインで意見を交換し、相互の興味や期待を共有する場を設けることで、対面時の交流がより有意義なものとなる。また、研修期間中の自主研修時間を活用し、非公式な交流機会を設けることも有効である。自主研修活動に現地学生が参加できる仕組みを整えることで、参加者が個別に深い関係を構築する場を提供できる。このような柔軟性を持たせた設計により、参加者それぞれの学びのニーズに応じた体験が可能となり、研修全体の質の向上が期待される。

②体験活動の多様化

参加者から寄せられた要望に基づき、プログラム内に伝統文化に関連する新たな体験活動を追加することが求められる。具体的には、伝統楽器の演奏体験、韓国特有の雑貨制作、さらには北朝鮮との国境視察といった、関心を引くテーマを取り入れることが考えられる。また、一部の活動が高額な費用を伴う場合には、地元の支援を活用した割引制度や、選択制プログラムを導入することにより、参加者が自身の予算や関心に応じて体験を選べる仕組みを構築する必要がある。このような体験活動の多様化は、文化的理

解を深めるとともに、研修の教育的意義を高める要因となる。

③情報共有の強化

日本人学生と韓国人学生との相互理解を促進するためには、事前の情報共有を強化することが重要である。これには、アンケートやプロフィールカードの交換など、互いの関心事項や趣味を共有する仕組みを導入することが効果的である。例えば、研修前にオンラインツールを活用して参加者同士の興味や期待を把握し、事前に関連情報を共有することで、対面交流の円滑化が期待される。このような準備を行うことで、異文化間コミュニケーションの基盤が強化され、研修全体の学びの効果が向上するものと考えられる。

④柔軟なスケジュール設計

現地学生の参加が難しい夏季休暇期間を避け、春休みや秋学期中に研修を実施する可能性を検討することも必要である。これにより、現地学生との交流機会が拡大し、プログラムの教育的効果が一層高まることが期待される。また、研修スケジュールに自由時間や自主研修を効果的に組み込み、参加者が自身の興味や関心に応じて選択可能なオプション活動を提供することも有効である。このような柔軟な設計は、多様な学びの機会を参加者に提供するとともに、それぞれのニーズに対応した実践的な学習を促進する重要な手段となる。

6. まとめ

令和6年度に実施された韓国夏季短期研修プログラムは、参加者から概ね高い評価を得た。特に、現地学生との交流や多様な文化体験活動は、プログラムの中核を成す重要な要素として高く評価されている。アンケート調査によれば、韓国人学生の親切で温かな対応や、現地独自の知識や体験を通じて得られた新たな学びに対する感謝の声が多く寄せられた。また、K-POPダンスや韓国料理作り体験といったアクティビティは、特に印象深い活動として挙げられ、参加者の文化的理解を深める重要な契機となったことが示されている。

しかしながら、いくつかの課題も明らかになった。その一つは、現地学生との交流時間の不足である。参加者はより多くの現地学生と接触し、密接な対話を求めていることが分かった。現地学生との交流は、異文化間の相互理解を深め、視野を広げる上で不可欠な要素である。今後は、オンラインツールを活用した事前セッションの導入や、テーマを設定したワークショップ形式の交流活動を検討することで、交流の質と頻度を向上させるべきである。

次に、文化体験活動の多様性も重要な課題として挙げられる。既存のプログラムに加え、伝統楽器の演奏体験や手工芸品制作といった新たな活動を取り入れることで、参加者の関心に応えるだけでなく、韓国文化の多面的な側面を学ぶ機会を提供できると考えられる。また、費用が高額なアクティビティに関しては、地元支援を活用した補助制度や、団体割引の導入を通じて、参加者の経済的負担を軽減する仕組みの構築が必要である。

さらに、事前の情報共有不足も指摘された重要な改善点である。参加者間および現地学

生との相互理解を深めるためには、事前アンケートやプロフィール情報の共有を活用し、各参加者の興味や期待を把握する仕組みを構築する必要がある。具体的な活動内容やスケジュールを詳細に共有することで、参加者の不安を軽減し、研修に対する期待感を高めることが可能である。

総じて、本プログラムは異文化理解を促進し、実践的な学びを提供する場として、非常に高い成果を上げていると評価される。とはいえ、明らかになった課題に適切に対応することで、さらに多くの参加者にとって価値ある体験を提供する可能性が広がる。次年度以降は、柔軟性と多様性を備えたプログラム設計を実現し、参加者の多様なニーズに応じた学びの場を提供することが期待される。このような取り組みを通じて、韓国夏季短期研修プログラムは、異文化交流を通じた教育的意義をさらに高める場として、引き続き重要な役割を果たすであろう。

参考文献

- (独) 日本学生支援機構, 大学間交流協定に基づく日本人学生留学状況調査, https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2024/04/data2022n.pdf (2024年12月1日に習得).
- Gaia, A. C. (2015). Short-term faculty-led study abroad programs enhance cultural exchange and self-awareness. *The International Education Journal: Comparative Perspectives*, 14(1), 21-31.